



友の会 創設45周年を迎えて

Fujita脳神経外科友の会
会長

金沢 敬雄

友の会の会員の皆さまを始め関係者の皆さま、こんにちは。日頃は友の会の活動に理解と惜しみ無い協力をして頂き心より感謝致します。今年の8月は1981年に友の会が発足して以来45年の経過を辿り誇るべき歴史有る節目の年となりました。

友の会を発足させる契機はつい最近まで現役で働いていた人が突然の脳卒中で倒れ手術を受けた後遺症が残りリハビリに励んでいる患者の姿を先生方が精神的なケアを何とかせにゃいかん、と奮起されて患者と共に膝を交えて語り合える場を設ける目的で故神野哲夫先生を始め佐野公俊先生と加藤庸子先生が患者と先生方の絆を深める目的で友の会を発足させて下さった先人の先生方が患者に対する情熱は友の会が歩んで来た45年もの歴史が物語っており他の大学病院では類例を見ない唯一無二の歴史を積み上げた誇るべき友の会であります。

5年前に世界を震撼させたコロナ禍騒動が発生する前は友の会の年中行事の一環として会員のみなさんを募り1泊の旅行を続けて参りましたがコロナ禍騒動が発生した3年間はやむを得ず中止を余儀なくされ3年前からは日帰り旅行と変更になりホテルで昼食をいただきながら3名の先生方が老人に適した分かりやすく丁寧な講演内容がとても好評でありました。6月7日の日帰り旅行は琵琶湖グランドホテルで湖を眺めながら先生方の講演が楽しみであります。

最後になりましたが皆さまの健康とご多幸をお祈りして挨拶とさせていただきます。





“Fujita友の会” 45周年に感謝

藤田医科大学名誉教授
総合新川橋病院 副院長・脳神経外科顧問

佐野 公俊

友の会45周年おめでとうございます。40周年記念誌は、加藤先生がばんたね病院に赴任されて6年目に発刊、またそれから5年が過ぎたということになります。5年ひと昔といわれる中、私も名古屋と川崎を往復するようになり、16年目になります。他人事のように私も2026年3月で81歳を迎えました。

この“Fujita脳神経外科友の会”は、初代神野哲夫先生の発案で、外来ではゆっくり患者さんとお話する時間がない、また高血圧脳出血で運ばれ、手術で命をとりとめた患者さんは、障害が残ри、お風呂に入れてくださる家族も大変だろうと看護師さん方の協力でゆっくり温泉に浸かることを叶えてあげたいという気持ちから始まったことも40周年誌にも書き添えましたが、神野先生が教授、院長職を去る時に、加藤先生にバトンタッチされたのが今現在に至っております。ばんたね病院が素晴らしく大きく、綺麗になったというお声をたくさん聞きますが加藤先生の貢献大で脳外科医局員もともに同じ方向も向いて、支えてくれるおかげであろうと思いますが、外来、オペ、留学生の受け入れ、ACNS学会の日々のサポート、常に海外の脳外科医の才能を引っ張り上げてくれる、休むことなく続けていることが病院を大きくする要因であると思います。

50年前に初めてCTが日本に入り、それまで脳出血か脳梗塞かは血圧が高いか低いか、顔色などで判定しておりましたがその時代の名医東大の沖内教授ですらその正解率はたかだか60%だったそうです。それがCTを一枚撮影すると100%出血か否かは診断できる画期的なものでした。それまでは、脳血管撮影が主体で脳血管の動きで間接的に診断しておりました。ただ、脳動脈瘤だけは脳血管撮影で診断でき、藤田に赴任する前から、先輩方は肉眼で手術をされておりましたが私の得意とする脳動脈瘤の手術は、自分のマイ顕微鏡で手術を行っておりました。顕微鏡、内視鏡、外視鏡も世に出てきて治療法も変化してきました、外科でもロボットの出現はめざましい発展です。今後はAIが導入され、診断部門では大きく変化することでしょう。

患者さんもめざましい治療法の進歩、多様な治療方法に戸惑うこともあるでしょうが、患者さんにとって何が一番体に侵襲がないかを考えながら、私たち医師は、不安を感じる患者さんの水先案内人にならなければならないと思います。私は、川崎、名古屋、そして私費を投じながらインドコルカタのアカデミーでのオペ指導、さらにコルカタでの大学病院建設に関わり、近年の血管内治療のほうの方が楽でよいと選択されてしまう患者さんがおられますが、将来部位によっては再発があると報告がある中、これは血管内、これは手術適応であるかを仕分けることができる脳外科医を育てていかなければならない仕事も増えました。これはどちらが適応なのかを尋ねに私のもとに全国からいらっしゃいますが、是非ご相談をしていただきたく思います。私は、今まで以上にオペ技術指導に関わってまいりたいと思います。

5年後の50周年記念誌が出る頃も皆様も私も元気であるとうれしいと思います。

ここまで“Fujita友の会”を支えてくださいました患者さん、スタッフの皆様、ありがとうございます。また引き続きよろしく願いいたします。



Fujita脳神経外科友の会 発足45周年を迎えて

藤田医科大学ばんだね病院 脳神経外科
教授／統括副院長

加藤 庸子

会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

このたび、Fujita脳神経外科友の会は発足45周年という大きな節目を迎えることとなりました。こうして今日の日を迎えられるのも、長年にわたり友の会を支えてくださった会員の皆様、ご家族の皆様、そして関係者の皆様のお力添えの賜物であり、心より深く感謝申し上げます。

本会は、創設者である神野哲夫名誉教授の「患者様は急性期だけでなく、その後の長い生活を見守り、寄り添っていくことが大切である」という思いのもとに始まりました。その精神は今もなお受け継がれ、友の会は患者様、ご家族様、そして地域の皆様をつなぐ大切な場として歩みを重ねてまいりました。

私自身、ばんだね病院に赴任して以来、多くの患者様、ご家族様、医療スタッフ、そして友の会の皆様に支えていただきながら歩んでまいりました。病院という場での診療だけではなく、友の会の活動を通して、皆様のお声に耳を傾け、日々の暮らしや不安、そして喜びに触れさせていただいたことは、私たち医療者にとってもかけがえのない学びであり、大きな励みとなっております。

これまで友の会では、旅行や講演会、医療相談、市民フォーラムなど、さまざまな活動を通して会員同士の絆を深めてまいりました。とりわけ、患者様同士が支え合い、励まし合う姿は、この会の大きな力であり、かけがえのない財産です。近年は社会状況の変化により、従来どおりの活動が難しい時期もございましたが、その中でも工夫を重ねながら、皆様とのつながりを絶やさぬよう努めてまいりました。

45年という歴史は、決して平坦な道のりではなかったと思います。しかし、その時々を支えてくださる方々がおられ、皆様の温かいお気持ちとご協力があったからこそ、今日まで歩みを進めることができました。改めて、歴代の会長様、役員の皆様、関係者の皆様に深く敬意を表します。

友の会は、患者様、ご家族様、そしてご希望される一般の皆様の会です。

「皆様は一人ではない」という思いを胸に、これからも互いに支え合い、安心と希望を届けられる会であり続けたいと願っております。

健康あってこそ日々の暮らし、そして人生です。

どうか皆様には、これからも心豊かに、お元気でお過ごしいただけますことをお祈り申し上げます。Fujita脳神経外科友の会が、これから先も50周年、さらにその先へと、皆様の手によって大切に育まれていきますことを心より願っております。

結びに、これまで長きにわたり友の会の発展にご尽力くださいましたすべての皆様に、改めて深く感謝申し上げます。



脳神経外科友の会45周年に寄せて

藤田医科大学ばんだね病院 病院長 堀口 明彦

脳神経外科友の会45周年誠にありがとうございます。永きにわたり、金沢敬雄会長、顧問の加藤庸子先生を中心に発展、継続してきたこの脳神経外科友の会は「継続は力なり」のごとくすばらしい組織でございます。45周年をお迎えとのことで心から敬服いたします。

ばんだね病院は名古屋市内で最も古い病院で2030年に100周年を迎えます。それに伴い建物も老朽化しており、少しずつ新たな建物を建て直しています。一方、世界政治が安定せず、物価高騰に伴い、建築費用の莫大な増加は全国の病院経営を難しくしています。ばんだね病院は脳神経外科を筆頭にすべての診療科が一丸となって地域に貢献することで、患者さん、近隣のクリニックの先生方から高い評判を受けており、良い経営状態が続いています。これも一重に脳神経外科友の会役員および会員の皆様のおかげ

であり心から感謝申し上げます。

2026年度がはじまり、新たな気持ちであらためてばんだね病院は地域医療に貢献できる病院として、また、高度医療を担う大学病院として努力していく所存です。国の政策である地域医療構想2040では高度急性期病院が集約化され、高齢者社会の中における効率の良い医療が求められており、ますます厳しい病院経営が待ち受けています。ばんだね病院は、これからも高い目標をもち、日本一の総合診療を基盤とした都市型地域支援中核病院をめざしていく所存です。

本年度も引き続き脳神経外科友の会の皆様のご支援・ご指導を何卒よろしくお願い申し上げます。

脳神経外科友の会 会長の金沢敬雄様はじめ、役員および会員の皆様の益々の発展とご健康を祈念いたします。

Fujita脳神経外科友の会45周年に寄せて

藤田医科大学ばんだね病院 事務部長 小林 雄一

このたび、Fujita脳神経外科友の会が45周年という節目を迎えられましたこと、誠にありがとうございます。長年にわたり活動を継続されてこられました皆様のご尽力に敬意を表するとともに、心よりお祝い申し上げます。

本会が今日に至るまで着実に発展を遂げてこれしたのは、金沢敬雄会長をはじめとする執行部の皆様、会員の皆様、そして顧問であられる加藤庸子先生ご尽力の賜物であり、その歩みに深い感銘を受けております。

さて、加藤庸子先生がばんだね病院に赴任され、本会の活動拠点が2014年に当院へ移った当時を振り返りますと、大変感慨深いものがございます。当時は病院建物が耐震基準を満たしておらず、現在のB棟を含む増改築工事の最中にありました。院内環境も決して十分とは言えず、患者数や職員数、医療機器の面においても現在とは大きく異なる状況の中での船出であったと記憶しております。

そのような中におきましても、現B棟の整備が進み病院の体制が整った折には、加藤庸子先生ならびに友の会の皆様の多大なるご協力を賜り、院内コンサートを開催することができました。当時は外部から演者をお

招きする運営体制や機材も十分ではなく、本会の皆様のお力添えなくしては実現し得なかった企画であったと感じております。初回にはチェロ奏者の加藤志麻様をお迎えし、多くの患者様や職員に感動を与える、大変意義深い催しとなりました。

その後、病院としては脳神経外科を中心に各診療科および全教職員が一丸となり、地域への貢献を使命として取り組みを重ねるとともに、手術室・透析室を備えたA棟の竣工や最新医療機器の導入を進めることで、患者の皆様に安心かつ質の高い医療を提供できる体制を整備してまいりました。近年では、医師をはじめとする教職員数の増加や医療機能のさらなる充実により、当院は地域においてより一層重要な役割を担う存在へと成長しているものと実感しております。

これもひとえに、加藤庸子先生を中心とした脳神経外科を温かく支えてくださっているFujita脳神経外科友の会の皆様のご支援の賜物であり、改めて深く感謝申し上げます。

結びに、本会の今後ますますのご発展と、関係者の皆様のご健勝ならびにご活躍を心よりお祈り申し上げます。



脳神経外科友の会45周年に寄せて

藤田医科大学病院 病院統括本部 統括看護部長
藤田医科大学東京先端医療研究センター 事業部長
藤田医科大学 羽田クリニック 副院長

眞野 恵子

fujita脳神経外科友の会、創立45周年記念誌の発刊、誠にありがとうございます。

45年前の友の会の拠点は藤田医科大学病院（本院）にありました。神野教授の患者さんを中心に発足した本会は、佐野公俊先生、加藤庸子先生へと受け継がれ、今では拠点をばんだね病院へと移し、歩みを続けてこられました。

かつての一泊旅行では、本院の脳神経外科外来前に停車したバスに、車椅子の患者様や看護師たちと一緒に乗り込んだこと。医師や看護師、留学生までもが一体となって入浴や食事の介助にあたったこと。旅先でお抹茶を振舞ったことなど、当時の情景がつい昨日のことにように思い出されます。

脳神経外科の病は、突然の宣告や生活の変化など、ご本人だけでなくご家族にとっても大きな不安を伴うものです。皆様が困難に向き合い、今日まで前を向いて歩んでこられたのは、この友の会という温かい居場所があったからこそだと確信しております。

私が活動に参加して感じるのは、ここで得られる「仲間との絆」や「一人ではない」という感覚の尊さです。医療が進歩し生活様式が変わっても、人の温もりや経験を共有する大切さは変わりません。会員の中には、病を克服したのちに病院ボランティアとして貢献してくださっている方もおいでになります。

45年間積み重ねられてきた「患者同士の繋がり」という素晴らしい伝統を大切にしながら、これからの時代に合わせた新しい交流の形も、皆様と一緒に築いていければ幸いです。

これまでの歴史を受け継ぎ、今後もこの絆がさらに深まっていくことを願うとともに、50周年そしてこれからも、友の会の皆さま誰もが安心して相談でき、笑い合える会であり続けますように心より応援しております。

最後になりますが、金沢敬雄会長をはじめとする歴代役員の皆様のご尽力に深く感謝申し上げますとともに、友の会の益々のご発展を祈念し、お祝いの言葉とさせていただきます。



Fujita脳神経外科友の会45周年に寄せて

～「あの蕎麦の香りが教えてくれたこと」～

藤田医科大学ばんだね病院 副院長・看護部長 三鬼 達人

Fujita脳神経外科友の会が創設45周年という節目を迎えられましたことを、心よりお慶び申し上げます。

本会がこれまで長きにわたり発展し、継続されてこられたのは、金沢敬雄会長、ならびに顧問の加藤庸子先生を中心とした皆様のご尽力の賜物であり、深く敬意を表します。

私は1998年に藤田医科大学病院に入職して以来、新人看護師のときから多くの学びをいただきながら友の会の皆さまと交流させていただいてきました。特にばんだね病院に赴任してからは、役員の皆さまとも懇意にさせていただいており、深く感謝申し上げます。

これまで、友の会の旅行等の行事に複数回参加させていただき、多くの患者さんやご家族の皆様と直接交流する機会をいただきました。また、市民フォーラムでの講演や会報誌への寄稿といった貴重な経験も賜り、大変ありがたく存じております。これらの機会は、医療者・看護師として患者さんの生活や思いに寄り添うことの大切さを改めて学ぶ機会となりました。なかでも印象に残っているのは、本院に勤務していた頃、まだ2年目の新米看護師であった時に、友の会の方が病院で蕎麦打ちを披露してくださった場面です。打ちたての蕎麦は大変美味しかったことはもちろんですが、それ以上に、入院中に患者さんとして拝見していた時の姿とは全く異なる、生き生きとした表情で蕎麦を打たれている様子が非常に印象的でした。この経験を通して、大きな病を乗り越えた方が社会に復帰し、その人らしく生活を送ることができるよう関わっていくことの重要

性を、強く実感いたしました。友の会の皆さまとの関わりは、私自身にとって看護師としての原点を見つめ直す貴重な機会であり、看護のあり方について深く考える契機となっております。また、スタッフにとっても患者さんとの関係性の中で看護の意義を再認識する機会となっており、看護の質の向上にも大きく寄与していると感じております。

医療を取り巻く環境が大きく変化する中においても、患者さんと医療者が相互に理解し支え合う関係性の重要性は変わるものではありません。友の会の活動は、その架け橋として重要な役割を果たしており、今後ますますその意義は高まっていくものと考えております。また、看護部長として、患者さんが「その人らしく生きること」を支える看護を組織として実現し続けるためにも、友の会の皆様とのつながりを大切に、その学びを現場に還元していく責任を果たしてまいりたいと考えております。

今後も本会とのつながりを大切にしながら、患者さん中心の医療と看護の実践に努めてまいります。そして、友の会の活動がさらに発展し、多くの方々にとって支えとなる存在であり続けることを心より祈念申し上げます。

結びに、これまで本会の発展にご尽力されてこられた関係者の皆様に深く敬意を表しますとともに、今後のさらなるご発展をお祈り申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。